早稲田大学審査学位論文
博士（人間科学）
概要書

青年期のボランティア活動への参加行動・不参加行動を規定する要因
Factors Affecting Youth Participation and Non-participation in Volunteer Activities

２０１７年７月

早稲田大学大学院　人間科学研究科
荒井　俊行
ARAI, Toshiyuki

研究指導教員：　西村　昭治　教授

本論文は，大学生を対象としてボランティア活動への参加行動や不参加行動を引き起こす内的メカニズムを明らかにして，今後の若者のボランティア活動の推進やボランティア教育のあり方に繋がる知見を得ることを試みたものである．

序論の第１章では，本論文の背景として，ボランティア活動の現代的役割・意義を社会的役割と教育的意義から整理した．さらに，我が国のボランティア活動の状況と若い世代のボランティア活動の現状について概観した．第２章では，ボランティア活動に関する心理学的な先行研究を概観のうえ，ボランティア活動推進の観点から今後検討すべき課題を整理した．第３章では，本論文の目的を設定と本論文の用語を整理し，本論文の構成と分析枠組みを提示した．

本論では，第２章での先行研究の課題を踏まえ，大学生のボランティア活動への参加行動と不参加行動を引き起こす内的メカニズムを明らかにするために実施した８つの実証的研究の検討結果を報告した．まず，第４章では，ボランティア活動への参加行動・不参加行動を規定する内的要因を検討した．研究１で，大学生のボランティア活動への参加行動・不参加行動を引き起こす参加志向動機と不参加志向動機の構成要因を明らかにすることを試みた．その結果，参加志向動機では，５因子が見出された．そして，大学生の参加志向動機は，本来の主体的・自発的な内発的要因に留まらず，外発的な要因も大きいことが明らかとなった．一方，不参加志向動機では，３因子が見出された．研究２で，大学生が抱くボランティア活動に対するイメージの構成要因を明らかにし，研究１で明らかにした参加志向動機と不参加志向動機に及ぼす影響を検討した．その結果，ボランティア活動イメージでは，５因子が明らかとなった．そして，ボランティア活動イメージは，ボランティア活動への参加行動・不参加行動を規定する重要な先行要因であることが明らかとなった．研究３で，先行研究の援助成果尺度を用いて，大学生のボランティア活動からの参加成果を明らかにしたうえ，研究１の参加志向動機と不参加志向動機に及ぼす影響を検討した．その結果，先行研究の援助成果尺度では，大学生の参加成果を必ずしも十分に捉えていない可能性が課題として示唆された．しかしながら，参加成果は，ボランティア活動への参加行動・不参加行動を規定する重要な先行要因であることが明らかとなった．研究４で，研究３で見えた課題を踏まえて，大学生が抱く参加成果志向の構成要因を新たに明らかにし，研究１の参加志向動機と不参加志向動機に及ぼす影響を改めて検討した．その結果，大学生の参加成果志向では，５因子が見出された．そして，参加成果志向と参加志向動機及び不参加志向動機との密接な関係性が改めて確認された．

第５章では，ボランティア活動への参加行動と不参加行動に及ぼす環境要因・相

互要因を検討した．研究５で，身近なボランティア経験者の存在が，研究１の参加志向動機と不参加志向動機に及ぼす影響を検討した．その結果，環境要因として身近なボランティア経験者の存在もボランティア活動への参加行動・不参加行動を規定する重要な要因であることが明らかとなった．研究６で，援助行動経験と被援助行動経験が研究１の参加志向動機と不参加志向動機に及ぼす影響を検討した．その結果，援助行動経験と被援助行動経験は，他者との間において自己強化的に循環する援助行動の一環として，参加志向動機を促すことが明らかとなった．

第６章では，心理的欲求と参加経験の主観的な質がその後のボランティア行動に及ぼす影響を検討した．研究７で，心理的欲求尺度を用いて，大学生の基本的な心理欲求が研究１の参加志向動機と不参加志向動機ならびに研究４の参加成果志向に及ぼす影響を検討した．その結果，ボランティア活動は，大学生の心理的欲求に応え得る有効な活動であることが示唆された．研究８で，ボランティア活動経験の主観的な質が，その後の参加意欲に及ぼす影響を検討した．また，ボランティア活動経験からの新たな参加成果志向が，その後の参加意欲に及ぼす影響を検討した．その結果，ボランティア活動経験の主観的な質が高いほど，その後のボランティア活動への参加意欲が促進されることが明らかとなった．そして，ボランティア活動経験からの新たな自己成長・精神的高揚という参加成果志向が，その後のボランティア活動への参加意欲を促すことが明らかとなった．

総括として，第７章では，８つの実証的研究を通じて明らかとなった研究成果の概要をまとめ，一連の研究の統合理論の枠組みとして，若者のボランティア行動への生起・促進モデルの提案を試みた．さらに，ボランティア活動推進の観点から，このモデルに基づくボランティア活動の推進方策等のポイントを提示し，論文の意義をまとめた．最後に，今後の課題と展望として，研究の対象者・説明要因・要因の形成過程・調査方法の各問題が論じられた．

本論文は，以下の点において，人間科学に対する貢献がある．（１）既存の社会システムの限界や少子高齢化の進行への対応という課題への方策のひとつとして，ボランティア活動を取り上げ，人間科学の持つ学問的意義の実践として，その課題解決に向けて一定の研究成果を挙げたこと．（２）ボランティア行動を規定する要因は多様であることを解き明かし，統合理論モデルとして「ボランティア行動への生起・促進モデル」を提案したことや具体的な推進方策等のポイントを提唱し，学問と社会をつなぐ人間科学としての研究成果を挙げたこと．（３）ボランティア活動という社会的現象がもつ多層的な現代的意義を研究するうえで，人間科学からのアプローチが有効な研究アプローチであることを実証したこと．